

はじめに

第二次世界大戦の終結から70年が経つが、日本人のあいだではアジア太平洋戦争の記憶は風化し、ナショナリズムが強まっているように思われる。その間、世界では多くの戦争や紛争が起り、戦争は決して過去の出来事になったわけではなかった。21世紀になってからもアフガン戦争、イラク戦争が起り、2014年にはウクライナや中東では新たな紛争が勃発している。「戦争のない世界」の実現こそ、人類最大の願望であり、努力目標であるにもかかわらず、その道筋は明らかではない。

一方で、1990年代から顕著になった、経済・通信・文化のグローバル化によって、先進産業諸国では相互依存が増し、戦争が起りづらい構造ができつつあることも事実である。かつては幾度となく戦争を行なったヨーロッパ諸国も、第二次世界大戦後は統合が進み、欧州連合（EU）諸国のなかでは、現在、戦争が起りえないようになっている。この歩みは長い時間をかけたものであり、「不戦共同体」は域内に限定されるが、経済や文化の緊密化が戦争廃絶の一つの道であることを示している点で、注目される。

他方で、グローバル化のなかで、資本主義化、画一化・規格化が進み、経済格差が広がり、貧困の問題がクローズアップされている。平和学のなかでも、貧困や差別、環境問題が、取り上げられることが多くなっている。平和学において、戦争よりも暴力が重視され、暴力の克服として平和が捉えなおされてきた。

それにもかかわらず、本書が「戦争をなくすこと」に焦点を当てるのは、戦争こそが最大の暴力であり、戦争の克服を科学的に考究することから平和学が始まり、「戦争のない世界」の実現の支柱となる理論構築が平和学の最大の課題だからである。「核のない世界」の実現も「戦争のない世界」の探求をとおしてもたらされると考えられる。というのも、戦争を正当化したり、肯定したりする言説を克服し、戦争が起りえない地球社会の構築が核廃絶の前提になる、と考えられるからである。

もちろん、平和の概念自体、歴史的に変化してきたのであり、平和学の対象を戦争に限ることはできない。しかし、暴力や差別は規範的には禁止され、犯罪とみなされるのに対し、戦争が合法化・正当化されてきたのは通時的に見られる現象であり、人類社会における最大の矛盾であり、克服せねばならない課題であることに変わりはない。

平和学は、自然科学、哲学、歴史学、政治学に比べはるかに新しい学問である。ほかの学問は主知主義的関心から探究されることも多いが、平和学はその多くが実践的関心から行なわれる学問分野である。もちろん、学問である以上、客観的な認識に到達しなければならないし、研究主体の実践的関心にも濃淡がある。平和学は、核戦争の回避という問題によって推し進められた経緯があるので、専門分野化せず、各分野の研究者が協力して取り組むという性格が強い。したがって、当然のことながら、平和学のテキストや概説書は、共著のかたちをとるのが通例である。平和学が対象とする問題が多岐にわたっており、一人の研究者がさまざまな領域を掘り下げるには限界があるからである。しかし、その結果、全体をとおして何を主張したいのか、明確に伝わらない構成になりがちである。もし一人で平和学を論じることに利点があるとしたら、広がりのある問題を一つの嚮導概念によって探究していくことができる点にあるように思われる。

また、平和が学問の対象であるだけでなく、一人ひとりの人間の希求であったという点に留意するなら、専門用語を駆使した理論の構築によって専門家のみ理解できるような議論を組み立てることは、避けるべきである。市民一人ひとりが平和創造、平和構築の主体であり、民族や国家を超えて協力し合うことによるのみ平和は実現できるのだから、紛争や暴力についての専門化した議論は避け、日常世界のことばで語ることを心がけたい。

第二次世界大戦後に生まれた平和学は、急速に発展し、裾野を広げ、平和学において平和は暴力と対置されるようになってきた。戦争が暴力の極限形態であり、戦争の研究が平和学の中心的テーマであることに変わりはない。本書が「戦争をなくす」という実践的課題に取り組もうとするのは、一般市民の平和ということばのイメージが戦争を軸に形成され、どのようにして平和を実現していくかという問題に深く関わっており、平和学はその問題に答えていく責務

を負っていると考えからである。平和学が実践的な学問である以上、本書が扱って立つ立場を明らかにしておきたい。本書では、一つには、非暴力に注目するだけでなく、非暴力主義の立場から戦争をなくすための理論構築を行っていききたい。もう一つには、相互理解や民際交流という、誰でもできる活動形態が市民レベルでの平和構築につながるという視点を明らかにしていきたい。これらの視点を重視するのは、市民が平和創造の主体となるために最も重要なテーマだと考えられるからである。すぐさま戦争をなくすことはできなくとも、人類が確かな歩みを踏み出すための方向性を示すことができれば、と考えたからである。

I部では、「平和とは何か」ということを意識して、平和学の歴史と対象、平和の概念、平和主義の概念を明らかにする。平和が論じられてきた態様を思想的・歴史的に明らかにすることによって、平和学の現代的課題を示したい。II部では、「非暴力の思想と運動」という観点から、非暴力闘争が政治変革の有効な手段となりうることを論証したい。マハトマ・ガンディーやマーティン・ルーサー・キングは非暴力運動の範例的重要性をもつので、これらの二人の非暴力運動は取り上げるが、非暴力は「声なき民」によって古今東西、実践されてきたのであり、20世紀において戦略的有効性が証明されてきたことにも注目したい。III部では、「戦争をなくすための思想と構想」という観点から、世界連邦、非暴力防衛、地球市民社会という三つの構想を、戦争をなくすための道として取り上げ、その実現可能性と課題を検討する。

もちろん、戦争廃絶への道筋について確定的な答えを出すことはできないが、方向性を示すことができればと考えている。テーマの設定上、構造的暴力の問題については詳しく論じることはできないが、戦争という最大の暴力の原因やメカニズムを明らかにすることによって、ほかの社会病理と通底する問題も明らかにできるはずである。本書は、非暴力を積極的原理として捉え、その潜在的可能性に注目し、平和学の新しい地平を切り拓いていくことをねらいとしている。